

新しい時代の外国語教育の推進と JACTFL の果たすべき役割

理事 當作靖彦

21 世紀はテクノロジーの急速、かつ急激な発達により、今まではつながらなかった人々と容易に、また即時につながることができる時代と言える。また、情報が絶えず増え続け、その情報に簡単にアクセスできる時代である。多様な人、モノ、情報とつながることにより、新しいものが創造されていく時代とも言える。コミュニケーション情報テクノロジーの発達により、私たち人間がどのように学び、どのように仕事をし、どのように人間関係を作り、社会活動するかが変化してきており、人間の歴史の中でも最も大きな変革が起こっているのが今であると言って過言でない。

このような変化の中で生活していくためには、21 世紀型スキルとしてまとめられる知識、能力、資質を持つことが重要であると主張されている。この中には、21 世紀が抱える問題、例えば、温暖化、人口問題、食糧問題などの知識、それらを解決するために必要な高度の思考能力、問題解決能力、創造性、協働力のほか、テクノロジーの発達に対応できるテクノロジーのスキル、情報のリテラシーなどが含まれる。また、多様な人たちとつながるためのコミュニケーション能力や異文化対応能力なども 21 世紀を生きるために非常に重要なスキルと考えられている。外国語教育はまさにコミュニケーション能力や異文化対応能力を身につけるための最適な機会を与えるものである。また、外国語を学習することにより、高度の思考能力や協働力、創造性なども効果的に発達することが様々な研究により示されている。

PISA の学力観に示されるように、教育においては、これまでの各教科の内容知識を得ることよりも、高度の思考能力、問題解決能力など 21 世紀型スキルを身につけることが教育のより高次元の目標と考えられるようになり、各教科の内容を学習することを通して、これらのスキルを身につけるように教育が行われる方向にある。外国語教育においても、文法・語彙を身につけること自体、あるいはそれを使ってのコミュニケーションができるようになることが教育の主要な目標ではなく、言語の知識、能力を身につける活動をする中で、21 世紀を生き抜くための知識、能力、資質を身につけることが最終的な目標と考えられるようになってきている。

現在の日本では外国語教育というと、その普及の度合いから英語教育と考えられる傾向がある。現在の学校教育における英語教育では、上述のような 21 世紀型スキルを効果的に身につけることができるであろうか。現実生活とは乖離した使い物にならな

い文法・語彙の知識をテストする大学入試合格を目標とする現在の英語教育では、21世紀に対応できる言語能力を持った人間を創り出すことができないのは火を見るより明らかである。巨大予備校の偏差値を気にして大学が英語の問題をつくるような受験産業に牛耳られた現状では、社会が本当に必要とする英語能力を持った人間を生み出すことを期待することはできない。

グローバル化で多様な人間がつながることで多様な考えが集まり、新しいモノを生み出す時代には、多様性が力であり、多様な人間を生み出す社会が強力な社会と言える。文科省が英語教育を考えるだけで精一杯で、ほかの言語の教育に手が回らない状況はまさに多様性を重視するグローバル化に反するものである。将来英語能力を必要しない者にも英語学習を強い、成人を過ぎてから、英語は必要でないことに気がつくのでいいと文科省が考える現状は、日本の将来を背負う青少年の時間とエネルギーを無駄にしているとしか言えない。この英語一辺倒の現状を変え、多様な言語を学ぶ機会を子供たちに小学校から与えなければ、多様性に富むグローバル化に対応できる日本人は生まれないのである。

英語の教師養成、研修にリソースを集中させているため、他の言語教育には手が回らないし、予算はない。だから他の言語教育には関与しないという態度を文科省が取るのであるならば、他の言語の教育は、JACTFLのような団体や民間が本格的に取り組めばよいであろう。受験に縛られた英語教育では21世紀型スキルを育むような教育のアプローチを採用していくことが無理であろう。受験の束縛が少ない英語以外の外国語教育こそ、先進的なアプローチを使い、社会に出て役立つ言語能力を与え、グローバル社会で活躍する日本の若者を作り出して行けるのではないかと思う。そして、その動きの中心になっていくのがJACTFLの役割であろう。JACTFLが大きな変革が起こっている時代の教育に大きな変革を起こす原動力になってほしい。

(カリフォルニア大学サンディエゴ校)